

1. コンセプト

「にぎわいが世代を超えてつながるまちへ」

時間軸：変化を受容し歩み続けるまち

空間軸：多様な商いが集積し国際ビジネス拠点となるまち

人間軸：人に寄り添い顔とふるまいが見えるまち

2. 時間軸

変化を受容し、歩み続けていくまち

これまで400年以上に渡り継承してきた「商い」と「人のネットワーク」による営みを基盤とし、時代の変化にひとつひとつ着実に対応してきた日本橋一の部地区。より良い未来に向けて、これからも時代の変化に適した歩幅で歩み続け、更新し続けるまちへ。

つながりを基盤に更新していくまちへ

一の部地区に展開される商いは時代を超えて面々と引き継がれるとともに空間平面的にも連続する広がりをも有してきた。それに伴う町衆のつながりも堅固であり、そのつながりを礎としたまちづくりを目指す。

時代の重なりを楽しむまちへ

江戸情緒、明治時代の風格、昭和の下町風情、現代の高層建築に至るまで、一の部の風景には江戸の拠点から日本の中心へと歩み続ける時代の重層を感じることができる。

時代の重なりを感じる風景と川辺空間をつなぐ通りを整備するとともに、散策性と情報発信拠点を兼備した、まち歩きをさらに楽しめるまちへ。

<時代の重層性を感じる一の部の風景>

江戸情緒を感じる老舗と江戸の風景を継承

創業400年を超える地元の老舗や新しい日本の老舗を集める専門店集積施設により、卸問屋が集まっていた当時のにぎわいが感じられる通りを継承し、来訪者が新旧の「江戸情緒」を許受する。

明治時代からまちを彩る風格ある建築物

明治時代から現在に至るまで、その重厚な佇まいを変わず保持し続けている日本銀行・三井本館・三越本店がある江戸桜通りの交差点。金融の中心地や商いの拠点として日本を牽引する姿が一堂に会する。

昭和の下町風情を感じる建物と路地空間

日本橋発祥である職住近接のライフスタイルが散見できる。歩きやすい通りや路地空間を残すことによりまちが多様な人々の多様な活動を許容でき、通りのにぎわいを地域全体で支えている。

現代の高層複合施設とビジネス拠点

中央通り沿いをはじめとする大規模再開発により、高層複合施設や国際ビジネス拠点が整備される。新規居住者や来訪者による地上のにぎわいも引き込み、平面だけでなく、まちを立体的に楽しむことができる。

<まち歩きの魅力を高め、発信するまちへ>

歩行者のための水辺空間を創出

水辺と来訪者の散策スポットをつなげるだけでなく、オフィスワーカーも立ち寄れる歩行者専用ネットワークを構築する。より景観に配慮した水辺空間を創出することで、まち歩きの魅力を高め、新たな憩いの場を創出する。

散策利便性と情報発信拠点を兼備

メトロリンクにより来訪者の多様な散策スタイルに対応しながら、情報集積・発信拠点となる日本橋案内所を兼備する。常に更新された情報を提供し、周辺の地域も巻き込み、一の部から日本橋の文化を発信する。

3. 空間軸

多様な商いが集積し、国際ビジネス拠点となるまち

老舗、江戸前、薬種問屋、金融を中心とする商いが集積する日本橋一の部は日本の商いの顔である。

個々の商いがまちを盛り上げ、そのにぎわいが連鎖して多様な表情が通りに表出している。

個々の商いが主役となるまちへ

老舗・江戸前・業種関連企業・飲食店・金融を中心とする商いが日本橋らしい来訪者との寄り添い方と誇りを持ち続けてきたことで、まちの魅力が生まれている。その魅力に引き寄せられ、多様なアクターが集い、まちのにぎわいが生まれるきっかけをつくり出している。

継承する文化を尊重しつつ、個々の商い全てがまちの主役としてにぎわいをつくる。

にぎわいが連鎖するまちへ

江戸時代から個々の商いがまちの仕事として成り立ち、それぞれの業種が関連し合ってきたという特徴を活かしていることが日本橋固有の商いである。これからも各業種が欠けることなく盛り上がることによって、相乗効果でにぎわいが連鎖し波及していくまち。

通りの表情が豊かなまちへ

一つ一つの商いの賑わいが連鎖して通りに多様な表情が表出する。例えば、仲通りは新旧の飲食店が連なり、旧日光街道には薬品関連の企業が建ち並ぶ。その豊かな表情を高めるため、江戸情緒を残し続ける通りや御影石で舗装した通り、福德神社への参道、或いはオフィスワーカーが気分転換できる裏性の強い通りなど、それぞれの通りの特徴を引き出すことで商いによるにぎわいを一の部から隣接する地域へも波及させる。

4. 人間軸

人に寄り添い、顔とふるまいが見えるまち

町会活動、防災活動に留まらず、歴史ある火消し組「い組」や祭事が継承されながら人と人をつなぎ、「三四四会(日本橋料理飲食組合)」のつながりや「日本橋地域ルネッサンス 100 年計画委員会」「名橋日本橋保存会」など日本橋固有の活動が重層している。今後も地域の子どもや居住者、オフィスワーカー、来訪者が多様な活動に参加し、まちとの関係を深めていくことのできるまちへ。

多様なライフスタイルが展開されるまちへ

神社を中心とした祭事が人々を結び、三四四会、日本橋地域ルネッサンス 100 年計画委員会、名橋日本橋保存会などの多様な活動と、住まう人・働く人・来訪者などの誰もが参加しやすいアクティブで祝祭性の豊かなまちへ。多様なニーズに応え、様々なライフスタイルがそれぞれの時間スパンで展開できるまち。

安心を育み災害に強いまちへ

「い組」などの繋がりを元に防災活動における連携をまち全体で強め、昼夜を問わず災害に強いまちへ。

避難訓練、防災活動を実施し、町会単位で災害に対する基盤を持ち、さらに祭や橋洗いの活動を通して子どもたちの安心を育み、町会同士・地区同士の連携を強化し、まち全体として誰もが安全に暮らし続けられるまち。

世代を越えて住み続けられるまちへ

代々住み続けている人から新規居住者まで、幅広い世代の人々にとって住みやすく住み続けられるまちへ。

新規居住者が町内会に入りやすくなる仕組みづくりから町内会外のつながりを深め、次世代が住めるまちへ。働きながら住むことのできる職住近接のまち。

5. 仕組み

ビジョンを更新し続ける仕組み

これまでのまちづくりビジョンのあり方は、過去から積み上げてきたまちの歴史や課題発見とその解決、そしてまちの理想を集めて、まちの30年後の姿を描くような構成のものが多かった。しかし未来には今からは予測できないことが起こるであろうし、今後社会はますます多様に変化していくであろう。このような未来の一点を目指すビジョンは固定的となり実態に即さない観念に陥りがちであるため、遠い目標に向かってまちづくりのための計画を立てるのではなく「予測できないことが起こることを認識した上で、日本橋一の部がどのような未来を見据え、どう構えていたら良いのか」という変化に対応できる仕組みをつくることが大切である。

変化に柔軟に対応できる世代がつながるまち

日本橋一の部では江戸時代から固有のネットワークを継承し、まちの伝統と誇りを共有してきた。世代ごとのネットワークという点では親世代は固い同世代のネットワークを築いているものの、子世代は親世代よりもコミュニティとの縁が遠く、地元のネットワーク構築が難しいのが現状である。そこで、まちとしてのネットワークとして、親世代と子世代のつながりを強くしていくことが肝要であり、想定外の事態が起こったときに世代を超えて、まちの将来像を議論・決定していく仕組みをつくることが求められる。

サステイナブルなまちづくりのモデルに

想定外の未来が起こることを予想してどのようなまちの将来像を描くのか。ビジョンに描かれていない想定外の事態が起こったときにでも、こういうまちになるべき

だ、こういうまちにしていこうという目指すべき方向性を組み込んだビジョン作りを目指す。

世の中がどう変化しても、日本橋一の部のこういうところはそのまま活かしていこう、こういうところを変えて対応していこうという、一の部に特有の地域文化を継承しつつ、変化に順応できる柔軟なまちづくりを目指そう。